桃一郎、東京勤務

○　朝　町

桃一郎はスーツに身を包み、出勤する。

ナレ　桃一郎の声

「8月1日、夏の始まり、社会に出てしばらく、今日は何気ない一日であった。しかし今日は様々な人に会った。私に普段とは違う感情にさせる出来事であった。」

しばらく歩いてると、電話が、桃一郎はスマホをポケットから取り出す。

画面を見て桃一郎は、顔を上げる。

周りを見渡し、電話を取る。

桃一郎

「もしもし。」

母

「もしもし桃一郎？」

桃一郎

「うん。」

母

「あんた最近どうしてるん？」

桃一郎

「別に、会社で忙しいわ。」

母

「忙しいって、なんも連絡してこうへんやん。」

桃一郎

「ごめん。」

桃一郎、下を向く。

母

「ちゃんとご飯食べてるん？」

桃一郎

「食べてる。朝もちゃんと起きてる。」

母

「ほんまか？」

桃一郎

「ほんま。」

母

「あっそ。仕事はどうなん？」

桃一郎

「まあ、普通かな。」

母

「普通じゃあかんやん、昇進のこと意識しな、結婚して家庭持たなあかんねんから。」

桃一郎

「うん」

母

「うんってほんまにわかってるん？」

桃一郎

「わかってる。もう仕事行かなあかんから。」

桃一郎は再び、あたりを見回す。

母

「あーそう。そういえば、最近始めたワインのサブスクあんねん、また今日の夜、掛け直してくれへん？」

桃一郎

「今日は飲み会あるから掛けられへんわ。」

母

「飲み会?この前も飲み会って言ってやんか。飲み会ばっか言ってるんちゃうやろな。」

桃一郎

「そんな行ってへんよ。会社のやつしか行ってないし、たまたまや。もう仕事あるし…切るで。」

桃一郎、目を触る。

母

「…わかった。」

桃一郎

「はい。」

母

「あんた…ほんま冷たくなったな。お母さんやねんから優しくしてよ。」

桃一郎

「ごめん。また連絡する。」

母

「…わかりました。」

桃一郎

「うん。じゃあね。」

桃一郎は電話を切る。

スマホをポケットに入れ、そのまま下を向き歩き続ける。

○　夕方

桃一郎は、帰路に付く。

しばらく歩いていると、前方の男の顔が目に入る。

男も桃一郎を見る。

桃一郎は足を止め、黒髪に白髪が混じった男の顔と頭を凝視。

同じく足を止め桃一郎を凝視する男の背中。

桃一郎

「たーちゃん？」

たーちゃん

「とーくん？」

桃一郎

「あっ」

たーちゃん

「とーくんやんな？」

桃一郎

「そうや」

たーちゃん

「久しぶり！」

桃一郎

「うわー久しぶり！」

桃一郎に笑顔が見える。

たーちゃん

「元気にしてた？」

桃一郎

「うん。たーちゃんは？」

たーちゃん

「僕も元気にしてたよ。大きくなったな。」

桃一郎

「うん。」

たーちゃん

「今、東京で働いてるんか。」

桃一郎

「そうやで」

たーちゃん

「どこなん？」

桃一郎は、スマホを出し画面を見せる。

桃一郎

「ここ。」

たーちゃん

「そこか！ええとこやな。とーくんも立派な大人になったなあ。そっかあ…最後にあったのが…小…」

桃一郎

「小…6かな」

たーちゃん

「そっかあ。今でもスポーツ続けてるん？」

桃一郎

「もうやってない。」

たーちゃん

「そうなん。なんでなん？いろいろやってたのに。」

桃一郎

「もう別に続ける気分じゃなくなったし…」

たーちゃん

「そっか…大会とか見に行ったなあ。」

桃一郎

「そやったな。」

たーちゃん

「今…お母さんどうしてはる？」

桃一郎

「さあね。今も独身でいてはるよ」

たーちゃん

「そっか…」

桃一郎

「たーちゃんは、あれからどうしてたん？結婚はしてるん？」

たーちゃん

「結婚してないよ。この人生、結婚とは無縁やったみたいやな。」

桃一郎

「そっか…でも当時は楽しかったな。遊園地とか連れてってくれたやん。」

桃一郎、うれしそうな表情を浮かべる。

たーちゃん

「そうやったな…２人でな…」

桃一郎

「そんとき、たーちゃん足怪我してたのとか覚えてるわ。」

たーちゃん

「そうやったっけ？」

桃一郎

「そうやったで、子どものときやけど覚えてるもん。」

たーちゃん

「そっか…」

2 人に沈黙が流れる。

すると遠くで大きな音が、何かが落ちたような音が鳴る。

たーちゃん

「ちょっと、僕このあと用事があるねん。」

桃一郎

「そうなん」

たーちゃん

「そうやねん。じゃあ…」

桃一郎

「じゃあ…」

たーちゃん

「またね。」

たーちゃんは桃一郎と反対の方向へまた歩き出す。

桃一郎は振り返る、たーちゃんの背中を見つめる。

しばらく見つめた後、ため息をつき、そして空を見上げる。

桃一郎は再び歩き出す。

○　夜

場面は変わり桃一郎は、中学校横の通学路を歩く、すると前方から声を掛けられる。

薬師寺

「桃一郎か？」

桃一郎は足を止める、困った表情

桃一郎

「そう…ですが…」

薬師寺

「そうか、やっぱり桃一郎か！俺や！薬師寺先生や！覚えてるか？」

桃一郎から困った顔が消え、笑顔が見える。

桃一郎

「先生！久しぶりですね？元気ですか？」

薬師寺

「元気や！久しぶりやな。地元から転勤してきて今、ここの中学校で先生やっとるんや。桃一郎は立派になったな！」

桃一郎

「先生はお変わりないですね。」

薬師寺

「そんなことないわ！…体力も落ちてきてしもたわ。桃一郎は、今は東京に住んでるんか？」

桃一郎

「そうです。新卒で、東京の暮らしと仕事で毎日時間があっという間に過ぎるんですよ。」

薬師寺

「そうか…大変そうやな。仕事はどうや？」

桃一郎

「正直、しんどいですね。毎日毎日会社に行って。」

薬師寺

「そうか…まあしんどいよな。わかるわかる。まあでもがんばれ。」

薬師寺、桃一郎の肩を叩く。

薬師寺

「続けてたら慣れてくる。もうちょっと時間たったら暮らしも良くなるわ。」

桃一郎

「ありがとうございます。」

薬師寺

「せや中学校の時のこと覚えてるか？」

桃一郎

「もちろんですよ、先生、担任で顧問やったじゃないですか。」

桃一郎に自然な笑みがこぼれる。

薬師寺

「せやなあ、いろいろあったなあ、怪我もあったし、泣くこともあったけど、最後の大会はかっこよかったぞ。よう走った。色んな生徒見て来たけど、桃一郎のことは今でも覚えてるわ。」

桃一郎

「そうですか。めっちゃ嬉しいです。先生も良い先生でしたよ。悩みも色々聞いてくれて、息子のようにかわいがってくれて、当時はほんまに頼りになりました。」

薬師寺

「そうか、今でも息子同然や！桃一郎は俺の立派な息子や！」

肩を揺らし笑う薬師寺の背中。

桃一郎も笑う。

薬師寺、時計を見る。

薬師寺

「今から、隣の学校で職員会議があるんや。」

桃一郎

「そうですか…」

薬師寺

「じゃあな、俺はここの中学校にいる。いつでも連絡して来いよ、東京でも面倒見たる。」

桃一郎

「ありがとうございます。」

薬師寺

「おう、じゃあな、仕事がんばれよ。」

桃一郎

「はい、さようなら。」

桃一郎は笑顔を見せお辞儀する。

桃一郎、再び歩き出す。

しかし涙をこぼす。

桃一郎、涙が止まらずすすり泣く、しかし歩みは止めない。

手で顔を拭く、しかし歩みは止めない。

ナレ　桃一郎の声

「幼少期の思い出、学生時代、私が経験したこと、人々が青春と呼ぶもの、それらは、もうすでに遠くの思い出になっていると思った。そして私は最近、感情があまり動いていないということに気づいた。」

桃一郎は歩き続ける。